30-1034

名城大学薬学部における学生実習の評価研究：到達目標に対する学生の自己評価と教員の客観的評価との比較

○武田 直仁[1]，竹内 烈[1]，橋爪 清松[1]，岡田 邦輔[1]（[1]名城大薬）

【目的】本学薬学部の各実習科目において、実習項目ごとに到達目標を提示し、これらの目標にどのくらい到達しているかを学生に自己評価させた。学生の主観的評価（自己評価）が客観的評価（学年順位、実習試験の成績）を反映しているかを調べ、学生指導、実習改善に役立たせることを試みた。

【方法】実習終了日に医療薬学科及び薬学科の学生を対象としたアンケート調査を記名方式で実施した。質問票は各実習項目の他、総合評価を表す 2,3 の質問を含めた 21 質問と、実習などに関する改善点などを書く自由筆記欄からなる。

【結果及び考察】実習科目 A において、学年順位の上位 1/4 と下位 1/4 の 2 群に調査票を分け、各質問の到達度（0～100%）の 5 段階分布間に有意差（$p < 0.05$）があるかを Mann-Whitney による検定を行った。その結果、1 質問にのみ差が認められた。一方、この科目の実習試験において、＞90 点以上を取得した学生と＜60 点以下の学生の 2 群間での検定では、7 質問に有意な差が認められた。有意差を認めた質問のいくつかは、知識、態度、技能が統合的に要求される問題解決型の質問項目に類別できるものであった。学生の自己評価は、必ずしも教員による客観的評価（学年順位、実習試験結果）を反映しているものではないことが示唆された。他の実習科目の結果についても、報告する。